

6 3 6 1 - 9 8 2
平成 20 年 1 月 2 5 日

各関係機関の長
各病虫害防除員 殿

宮崎県病虫害防除・肥料検査センター所長

平成 19 年度病虫害発生予報第 10 号について
平成 19 年度病虫害発生予報第 10 号を発表したので送付します。

平成 19 年度病虫害発生予報第 10 号

向こう 1 か月間における農作物の主な病虫害の発生動向は、次のように予想されます。

発生予報の概要

作物名	病虫害名	発生量の 平年比	記載ページ
施設野菜全般	病害一般	-	2
	タバココナジラミ類	やや多～多	2
冬春キュウリ	べと病	やや多	3
	うどんこ病	並	3
	灰色かび病	並	3
	褐斑病	やや多	4
	ミナミキイロアザミウマ	やや多	4
	タバココナジラミ類	やや多	4
	黄化えそ病 (MYSV)	-	4
冬春ピーマン	斑点病	並	4
	うどんこ病	多	4
	ミナミキイロアザミウマ	やや多	4
	黒枯病	前～前々年 より多い	5
冬春トマト	葉かび病	並	5
	灰色かび病	多	5
	菌核病	やや多	5
	タバココナジラミ類	多	6
	トマト黄化葉巻病 (TYLCV)	前年と同程度	6
冬春イチゴ	うどんこ病	多	6
	アブラムシ類	やや多	6
	ハダニ類	多	6

病虫害発生予察注意報を発表

作物の生育状況 (1月中旬)

冬春キュウリ、冬春ピーマン、冬春トマト、冬春イチゴは収穫期であった。

2月の気象予報

平年に比べて曇りや雨の日が多く、気温は平年並又は高い、降水量は平年より多い、日照時間は少ないと予想されている。(1か月予報 鹿児島地方気象台1/18発表)

発生予報の根拠および防除対策

施設野菜全般

1 病害一般

長期予報によると、平年に比べて曇りや雨の日が多く、気温の変動が大きい見込みである。また、気温は平年並み又は高い、降水量は多い、日照時間は少ないと予想されていることから、各種病害の発生が懸念されるため、気候の変化には細心の注意を払い、施設内の温湿度管理を徹底する。

昨年末からの気象をみると、最低気温が平年より高い傾向が続いており、平年と比較して暖房機等の稼働が少ない可能性が推察されます。(下図参照)

コスト低減のため、夜温を低めに管理したり、多重被覆に用いている資材によっては、施設内が多湿になりやすく、気流が停滞するなどして病害の発生が助長される傾向があるので特に注意する。

注意の必要な病害の例

キュウリ：

べと病、灰色かび病、
菌核病、斑点細菌病など

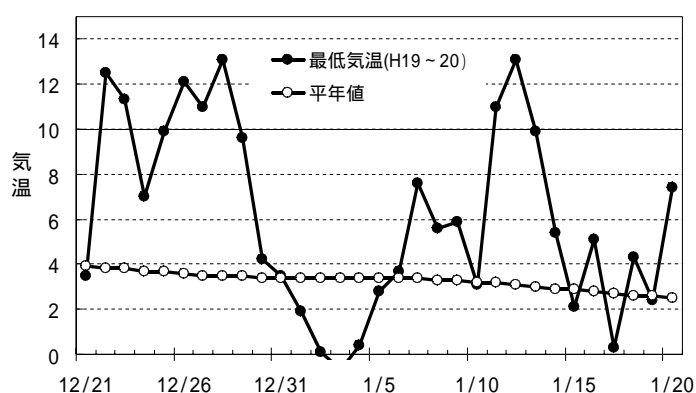
トマト：

灰色かび病、疫病、
菌核病、葉かび病など

ピーマン：

黒枯病、斑点病、菌核病
うどんこ病など

日最低気温の推移(宮崎市)



2 タバココナジラミ類 (タバコナジラミ、バイオタイプQ、シルバーリーフコナジラミ) (やや多~多)

[予報の根拠]

- 1) 冬春キュウリでの発生面積率55.0%(平年21.7%)は平年より多、百葉当たり虫数4.3頭(平年3.3頭)は平年よりやや多である。
- 2) 冬春トマトでの発生面積率50.0%(平年19.7%)、百葉当たり虫数6.9頭(平年1.5頭)はいずれも平年より多である。
- 3) 冬春ピーマンでの発生面積率20.0%(前年7.7%、前々年7.7%)、百葉当たり虫数1.1頭(前年0.1頭、前々年0.2頭)で、前年~前々年より多い。

[防除上の注意]

- 1) タバココナジラミ バイオタイプQとシルバーリーフコナジラミの形態上の差異は成虫、幼虫ともに確認されておらず、両種の肉眼での区別は困難である。
- 2) 多発するとスス病を併発して商品価値を著しく損ねるので初期防除を徹底する。
- 3) 低密度でも、トマトでは黄化葉巻病(TYLCV)を媒介したり、ウリ科作物(メロンやキュウリ)では黄化症の発生に関与することが明らかになっているので、特に注意が必要である。
- 4) タバココナジラミ バイオタイプQに効果のある殺虫剤が少ないことから、薬剤散布後は防除効果に注意を払い、必要に応じて適宜追加防除を行う。
- 5) 有効な薬剤に対する抵抗性の発達を回避する観点からも同一薬剤の連用は極力行わず、ローテーション散布を心がける。また、抵抗性発達の可能性が低いポタニガード乳剤等の微生物農薬や、物理的に窒息死させる粘着くん液剤等の薬剤を防除体系に組み込む。

- 6) 施設栽培では防虫ネットを必ず設置するとともに、光反射マルチや近紫外線カットフィルム、黄色粘着板等の物理的防除手段も利用する。

冬春キュウリ

1 ベと病 (やや多)

[予報の根拠]

- 1) 1月中旬の発生面積率75.0%(平年72.2%)は平年並、発病葉率19.9%(平年16.3%)は平年よりやや多である。
- 2) 向こう1か月の気象は平年に比べて曇りや雨の日が多い、気温は平年並又は高い、降水量は平年より多いと予想されている。

[防除上の注意]

- 1) 湿度が高いときに発生しやすく、激発すると防除が困難となるので、予防散布に重点をおき発生が見られたら初期防除を徹底する。
- 2) 肥料切れや草勢の衰えは発生を助長するので、肥料切れしないように肥培管理に注意する。

2 うどんこ病 (並)

[予報の根拠]

- 1) 1月中旬の発生面積率50.0%(平年42.4%)、発病葉率2.8%(平年4.7%)はいずれも平年並である。

[防除上の注意]

- 1) 病勢が進展してからでは防除効果が低くなるので、発病を確認したら早めに防除する。
- 2) 耐性菌を生じやすいので、同一系統薬剤の連続散布を避ける。
- 3) 乾燥時に多発するので、ほ場が過乾燥にならないように管理に注意する。

3 灰色かび病 (並)

[予報の根拠]

- 1) 1月中旬の発生面積率0.0%(平年12.0%)、発病果率0.0%(平年0.4%)はいずれも平年よりやや少である。

- 2) 向こう1か月の気象は平年に比べて曇りや雨の日が多い、気温は平年並又は高い、降水量は平年より多いと予想されており、本病の発生・蔓延に好適な条件が続くと考えられる。

[防除上の注意]

- 1) 多湿条件で発生しやすいので、日中の換気、夜間の加温等で湿度低下をはかり、曇雨天日には加温機の送風を作動させる等、結露防止に努める。
- 2) 花卉等の発病に注意し、初期防除を徹底する。なお、薬剤耐性菌が出現しやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。

4 褐斑病 (やや多)

[予報の根拠]

- 1) 1月中旬の発生面積率40.0%(平年39.4%)は平年並、発病葉率6.7%(平年4.7%)は平年よりやや多である。

- 2) 向こう1か月の気象は平年に比べて曇りや雨の日が多い、気温は平年並又は高い、降水量は平年より多いと予想されている。

[防除上の注意]

- 1) 多発してからの防除は困難なので、初期防除を徹底する。
- 2) 窒素肥料の多用は発病を助長し、過繁茂になって通風を妨げるので適正な肥培管理に努める。
- 3) 摘除した発病葉はほ場外に持ち出し処分する。

5 ミナミキイロアザミウマ (やや多)

[予報の根拠]

- 1) 1月中旬の発生面積率10.0%(平年6.9%)は平年並、葉当たり虫数0.2頭(平年0.1頭)は平年よりやや多である。
- 2) 向こう1か月の気温は平年並又は高いと予想されており、本虫の増殖に好適であると考えられる。

[防除上の注意]

- 1) 多発してからでは防除効果が低くなるので、低密度のうちに防除する。

6 タバココナジラミ類 (やや多)

- 1) 1月中旬の発生面積率55.0%(平年21.7%)は平年より多、百葉当たり虫数4.3頭(平年3.3頭)は平年よりやや多である。
- 2) 向こう1か月の気温は平年並又は高いと予想されており、本虫の増殖に好適であると考えられる。

[防除上の注意]

施設野菜全般の項参照

7 黄化えそ病 (MYSV)

[防除上の注意]

- 1) 平成17年に初発確認後発生がみられなかったが、10月下旬に一部の地域で数例の発生が確認されたことから、今後、厳重な警戒が必要である。
- 2) 媒介虫であるミナミキイロアザミウマの防除を特に徹底する。

冬春ピーマン

1 斑点病 (並)

[予報の根拠]

- 1) 1月中旬の発生面積率33.3%(平年32.0%)、発病葉率0.9%(平年2.8%)はいずれも平年並である。
- 2) 向こう1か月の気象は平年に比べて曇りや雨の日が多い、気温は平年並又は高い、降水量は平年より多いと予想されている。

[防除上の注意]

- 1) ハウス内が高湿多湿にならないように、換気と水管理に注意する。また、整枝を行って茎葉が過繁茂にならないようにする。
- 2) 病勢が進展してからでは防除効果が低いので、予防散布を行う。

2 うどんこ病 (多)

[予報の根拠]

- 1) 1月中旬の発生面積率66.7%(平年55.4%)は平年並、発病葉率13.3%(平年5.2%)は平年より多である。

[防除上の注意]

- 1) 乾燥した条件で発生しやすいので、乾燥させすぎないようにする。
- 2) 病勢が進展してからでは防除効果が低いので早期発見に努め、発病を確認したら早めに防除する。

3 ミナミキイロアザミウマ (やや多)

[予報の根拠]

- 1) 1月中旬の発生面積率60.0%(平年33.6%)は平年よりやや多、10花当たり寄生虫数1.2頭(平年1.2頭)は平年並である。
- 2) 向こう1か月の天候は平年に比べて気温が高いと予想されており、本虫の増殖に好適な環境がつづくと考えられる。

[防除上の注意]

- 1) 10花当り寄生虫数が1頭から被害果が出始める。また多発してからでは防除効果が低くなるので、低密度のうちに防除を徹底する。

4 黒枯病 (前年～前々年より多い)

[予報の根拠]

- 1) 1月中旬の発生面積率26.7% (前年7.7%、前々年0.0%)、発病葉率1.5% (前年0.1%、前々年0.0%)は前年及び前々年より多い。
- 2) 向こう1か月の気象は平年に比べて曇りや雨の日が多い、気温は平年並又は高い、降水量は平年より多いと予想されている。

[防除上の注意]

- 1) ほ場内が多湿条件にならないよう、換気に努め、排水を良好にするとともにマルチなどを行う。
- 2) 被害茎葉、果実は伝染源となるのでほ場外に持ち出し、適切に処理する。

冬春トマト

1 葉かび病 (並)

[予報の根拠]

- 1) 1月中旬の発生面積率0.0% (平年11.4%)、発病葉率0.0% (平年1.0%)はいずれも平年並である。
- 2) 向こう1か月の気象は平年に比べて曇りや雨の日が多い、気温は平年並又は高い、降水量は平年より多いと予想されている。

[防除上の注意]

- 1) 多湿条件で発生しやすいので、ハウスの換気を良くする。
- 2) 発病初期の防除を徹底する。

2 灰色かび病 (多)

平成19年度病害虫発生予察注意報第12号(平成20年1月25日発表)

[予報の根拠]

- 1) 1月中旬の茎葉での発生面積率57.1% (平年1.8%)、発病株率6.1% (平年0.0%)はいずれも平年より多である。
- 2) 果実での発生面積率7.1% (平年0.8%)は平年より多、発病果率0.07% (平年0.05%)は平年よりやや多である。
- 3) 向こう1か月の気象は平年に比べて曇りや雨の日が多い、気温は平年並又は高い、降水量は平年より多いと予想されており、本病の発生・蔓延に好適な条件が続くと考えられる。

[防除上の注意]

- 1) 多湿条件で発生しやすいので、日中の換気、夜間の加温等で湿度低下をはかり、曇雨天日には加温機の送風を作動させる等、結露防止に努める。
- 2) 花弁等の発病に注意し、初期防除を徹底する。なお、薬剤耐性菌が出現しやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。

3 菌核病 (やや多)

[予報の根拠]

- 1) 1月中旬の発生面積率7.1% (平年3.5%)、発病株率0.14% (平年0.11%)はいずれも平年よりやや多である。
- 2) 向こう1か月の気象は平年に比べて曇りや雨の日が多い、気温は平年並又は高い、降水量は平年より多い、日照時間は少ないと予想されている。

[防除上の注意]

- 1) 多湿条件で発生しやすいので、ハウスの換気を良くする。
- 2) 発病初期の防除を徹底する。

4 タバココナジラミ類 (タバコナジラミ、タバコナジラミバリエイティブQ) (多)

- 1) 1月中旬の発生面積率50.0% (平年19.7%)、百葉当たり虫数6.9頭 (平年1.5頭) はいずれも平年より多である。
- 2) 向こう1か月の気温は平年並又は高いと予想されており、本虫の増殖に好適であると考えられる。

[防除上の注意]

施設野菜全般の項参照

5 トマト黄化葉巻病 (TYLCV) (前年と同程度)

[予報の根拠]

- 1) 定植初期から各地で散発的に発生が見られている。(聞き取り)
- 2) 媒介虫であるタバココナジラミ類が多発生(前述)であることから、今後気温の上昇に伴い、本病の発生・拡大が懸念される。

[防除上の注意]

- 1) 黄色粘着トラップ等を設置し、コナジラミ類(媒介虫)の早期発見に努めるとともに、栽培期間中を通して防除を徹底し、本虫の密度を抑制する。
- 2) 施設内外の雑草はコナジラミ類の寄主となるので除草を徹底する。また、施設内では栽培目的以外の不要な作物や観葉植物等は栽培しない。
- 3) 発病株は伝染源になるので、根ごと抜き取り、土中に埋めるかビニル袋に入れて枯れるまで密閉する。ウイルスは植物全体に存在し、発病部位を除去しても伝染源になるため、必ず株全体を除去する。

冬春イチゴ

1 うどんこ病 (多)

平成19年度病害虫発生予察注意報第13号(平成20年1月25日発表)

[予報の根拠]

- 1) 1月中旬の葉での発生面積率57.1% (平年26.9%)、発病葉率7.1% (平年1.4%) はいずれも平年より多である。
- 2) 果実での発生面積率7.1% (平年11.7%) は平年並み、発病果率0.4% (平年0.5%) は平年よりやや多である。

[防除上の注意]

- 1) 初め葉裏に発生しやすいので早期発見に努め、初期防除を徹底する。
- 2) 激しく発病すると防除効果が低くなるので、予防に重点をおき、発病後は散布間隔を短くするなど発病初期の防除を徹底する。
- 3) 発病果など被害部は伝染源になるので早めに取り除きほ場内に放置しない。

2 アブラムシ類 (やや多)

[予報の根拠]

- 1) 1月中旬の発生面積率50.0% (平年20.3%) は平年より多、寄生株率3.6% (平年2.8%) は平年並である。

[防除上の注意]

- 1) 多発すると新葉の展開が不十分になって奇形葉となったり、スス病を併発して、樹勢や果実品質を著しく損ねるので注意が必要である。
- 2) この時期の防除はミツバチへの影響が懸念されるので、十分に留意する。

3 ハダニ類 (多)

[予報の根拠]

- 1) 1月中旬の発生面積率92.9% (平年42.3%)、寄生株率24.7% (平年11.0%) はいずれも平年より多である。
- 2) 向こう1か月の天候は平年に比べて気温が高いと予想されており、本虫の増殖に

好適な環境がつづくと考えられる。

[防除上の注意]

- 1) 収穫期に寄生数が増加してからの防除は困難なので、低密度時から防除を徹底する。
- 2) 株整理後の葉数が少なくなった時期に薬剤散布を行うと防除効果が高くなる。茎葉繁茂時には散布圧を強めて、葉裏に良くかかるように散布する。
- 3) 薬剤感受性の低下を避けるため、同一種類・系統の薬剤の連用を避ける。

農薬散布時のドリフト対策について

- 1 ポジティブリスト制度の施行に伴い、農薬の使用については今まで以上に厳重な注意を払うことが必要です。
- 2 風の弱いときに、ノズルや散布方向、噴霧圧力などに注意して、適正な農薬散布を心がけましょう。
- 3 地域でよく話し合い、農薬の使用時期や農産物の栽培内容などを十分調整しましょう。
- 4 農薬の散布について疑問点がありましたら、病虫害防除・肥料検査センターもしくは最寄りの農業改良普及センターへお問い合わせください。

その他

- 1 農薬適用の有無などについては次のホームページで確認してください。
日本植物防疫協会ホームページ <http://jppn.ne.jp>
農林水産省ホームページ <http://www.maff.go.jp/nouyaku/>
- 2 農薬の使用に当たっては、農薬使用基準の遵守並びに危被害の発生防止に努めましょう。特に水質汚濁性農薬ベンゾエピン剤（商品名、マリックス乳剤、粒剤等）は使用しないこと。
- 3 発生量（程度）の区分
多 い （高 い） やや多いの外側 10%の度数の入る幅
やや多い （やや高い） 平年並の外側 20%の度数の入る幅
平年並 平年値を中心として 40%の度数の入る幅
やや少ない （やや低い） 平年並の外側 20%の度数の入る幅
少ない （低 い） やや少ないの外側 10%の度数の入る幅
（平年値は過去 10 年間の平均）
- 4 予察情報の種類
病虫害防除・肥料検査センターから発表する情報は次の 5 つです。
 - 1) 予報・・・向こう 1 か月の発生状況を予測し、毎月 25 日前後に発表する。
 - 2) 注意報・・・主要な病虫害の多発生が予想され、かつ早めに防除が必要な場合に発表する。
 - 3) 警報・・・主要な病虫害の大発生が予想され、かつ緊急に防除が必要な場合に発表する。
 - 4) 特殊報・・・県内で初めて発生を認めた病虫害がある時や、病虫害の発生様相が特異な時に発表する。
 - 5) 防除情報・・・注意をうながす必要がある病虫害の発生状況や、各種の防除技術指導情報について随時発表する。

お知らせ (<http://www.jppn.ne.jp/miyazaki/>)

病虫害防除・肥料検査センターでは、ホームページで情報を提供しています。予察情報の根拠となる地域別調査データ、防除対策等を掲載しています。ぜひご利用ください。

【 文書取扱 】

病虫害防除・肥料検査センター 櫛間
TEL:0985-73-6670 FAX:0985-73-7499
E-mail: byogaichu-hiryo
@pref.miyazaki.lg.jp